



航海機器がずらりと並ぶ大型パワーボートのヘルムステーション周り。「こんな感じで、見たいときに取り出せるのが便利」と、ニューベックスマートを入れたタブレットを手に、青柳さんは話す



今年のゴールデンウィーク以降は、管理業務を請け負っている58フィート艇(写真)で、東京湾から沖縄までのクルージングに船長として乗船。ニューベックがあるので、離島での寄港も安心だ

近年、国内のプレジャーボートの大型化が進んでいるが、そういった大型艇の場合、運航管理全般をプロに任せているケースがほとんどだ。神奈川県横浜市のblu×blue(ブル・ブルー)社も、そんな業務を手掛けている会社の一つ。艇の運航管理、メンテナンス、あるいはキャプテンやクルーの派遣、艇の回航、外航船舶の受け入れなど、幅広い業務を取り扱っている。代表の青柳廣行さんに、お話を伺った。

「弊社ではプレジャーボートの運航管理全般を取り扱っています。私自身も船長として、お客さ

まの船でいろいろな場所にクルーズに出かけたり、お客さまから船を預かって目的地まで回航したりと、さまざまなお手伝いをしています。メンテナンスなど船舶の保守管理はもちろんですが、実際に船を走らせる場合には、何よりも安全に航行することが大切なのは言うまでもありません」

年間の航海距離は、20,000海里を超えるとのこと。その青柳船長が、航海用電子参考図「ニューベック」をナビゲーションツールの一つとして愛用しているという。

「昔からデジタルチャートには興味があって、い

## ニューベックがあるから、 全国どこの港にも入れます 船舶運航管理のプロ／青柳廣行さんに聞く

# 広がる ニューベック ファミリー

(一財)日本水路協会が発行する航海用電子参考図「ニューベック」。各種船用機器のマップデータとして導入されるほか、スマホ&タブレット向けアプリも登場し、「ニューベックファミリー」として多くのユーザーに認知されている。そんなニューベックは、一般のプレジャーボートユーザーのみならず、プロフェッショナルのニーズにも応える製品となっている。

協力=シティマリーナヴェランス



左：船内で愛用のノートパソコンを広げ、ニューベックを立ち上げてもらった。事前に航海計画を立てる際に、非常に重宝しているそう  
上：青柳さんのツール。右からパソコン、タブレット、スマホ。これら全てのツールでニューベックが使えるようになり、これまで以上に使用機会が増えたそう

ろいろなものを見つけては試していました。ニューベックは発売直後に、これはよさそうだなと思って購入し、ずっと使っていますよ」

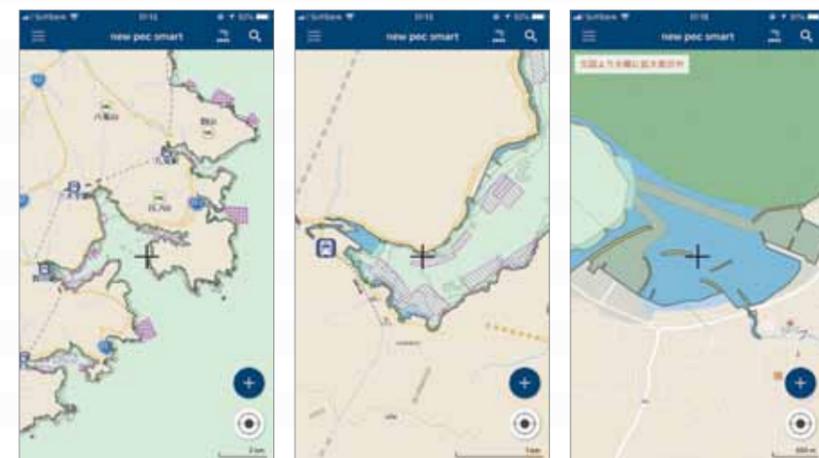
お客さまの船を船長として預かる以上、安全のために信頼のおけるツールを使うのは、至極当然のこと。その実力に、プロも太鼓判を押す。

「仕事で、日本全国どこの海も走る可能性があります。そんな航海中、急に避難港に入らなければならないケースも出てきます。ニューベックには、小さな島の小さな港でもきちんとデータが入っているので、これがないと走るのは無理と言ってもいいほどです。以前は、紙の海図に加えて港湾案内(『Sガイド』)が必携だったんですが、今ではパソコンが手放せなくなりました」

青柳さんは、航海計画の立案時にニューベックをフル活用している。また、回航業務の場合など、その船に初めて乗るケースも多く、船に設置されている航海機器が不十分ということも少なくないし、機器も船ごとにさまざま。だから、自分自身で持ち込んだツールでナビゲーションを行うことが必須になるわけだ。

「最近では、『Windy』や『GPV気象予報』など、出航前に気象情報が簡単に手に入るようになり、天気が悪そうな日は海には出ません。でも、あるとき関西から関東へ船を運んでいたときのこと。洋上でどんどん海象が悪くなってきて、どこかの港に避難しなければということになったんです。結局、紀伊半島東岸の尾鷲の南、賀田湾というところに入ってやり過ごしましたが、ニューベックがなければ、かなり厳しかったですね」

上のニューベック画像を見れば分かるが、狭く



複雑な海岸線が続く、紀伊半島東岸。画面中央の湾の左奥(西)にあるのが賀田湾で、青柳さんはかつて、ここで悪天候をやり過ごした  
賀田周辺を拡大表示したところ。両岸に定置網が張り巡らされており、ボートが走れる水面は非常に狭い。ニューベックを頼りに、奥へと進んだ  
港を拡大表示していくと、水深も色を分けて細かく表示されているほか、岸壁や堤防の形状もよく分かる。航空写真も併用して情報を集めている

入り組んだ湾内には漁具・定置網が多数設置されており、情報を知らずして、中に進んでいくのは相当難しいと思われる。青柳さんの場合、ニューベックを拡大表示して水深など細かな情報を収集しつつ、Googleマップの航空写真なども併用し、この岸壁なら安全に泊められそうだという判断を下しているそうだ。

「沖縄に行く途中、与論島の港に入ったことがありました。そんな離島の小さな港でも、海外製のマップデータとは違い、ニューベックには詳細な情報が載っています。日本全国、港に関しては全て大丈夫なんじゃないでしょうか」

日本全国の海岸線や港を網羅し、プレジャーボートが知りたい水深や定置網などの情報が収録されているのは、ニューベックの最大の特徴だ。

そんな青柳船長が、今年3月にデビューしたスマホ&タブレット用アプリ「ニューベックスマート」も、すでに実践で活用しているという。

「パソコンの場合、どうしても電源の心配をしなければいけませんでした。スマホならばバッテリーもある程度はもちますし、船上でも容易に充電ができます。スマホとタブレットの両方にアプリを入れていますが、船上のどこにいても、見たいときにすぐに手元で見られるのは本当に便利です」

休日に海を楽しむユーザーも、仕事で船を走らせるプロも、安全に航海するという基本は変わらない。プロも信頼して活用するニューベックは、まさに「あらゆる航海を支えるナビゲーションツール」と言えるだろう。

航海用電子参考図「new pec」

JHA (一財) 日本水路協会

ニューベックファミリー



new pec  
ファミリー

E-CHART KODEN JRC FUSOLE FURUNO HONDEX マップル・オン